
100の彼方

向日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

100の彼方

【Nコード】

N3867E

【作者名】

向日

【あらすじ】

人工知能予想型コンピューター“ラプラス”世界の全てを知ることができる悪魔がコンピューターとしてつくられた。これにより犯罪も未然に防がれ、自然災害も最小限に防がれるようになった。そんな中、惑星探索のために向かわせた探索ロボットが忽然と消えてしまう。人類が進歩すればするほど見えてくる世界の真実。その真実に平凡な高校生“千尋”だけが徐々に気づき始める…。

序章 1：ラプラス

空を仰げば満ちてくる。

私の気持ちで…。

私は“上山千尋”、17才。

「千尋 そんなところでなにしてるの？」この子は私の友達で名前は“松村真奈美”。

元気とノリはいいが、場所を選ばないのが玉に瑕。

「真奈美は元気いいねー。私は黄昏てたよ。」

学校の屋上が私のお気に入りの場所。

目の前にはグラウンドが広がり、すぐ右には校舎が見える。

「そんなことより！また地震あるらしいよ！長野の南部で！」

心なしか真奈美の目が輝いてみえる。

「人の不幸を喜ぶのは悪いよ！」

もちろん真奈美がそんなやつじゃないことは知っている。

「そんなつもりはないよ！ただ“ラプラス”の予想だから長野の人達大丈夫かなって…」

しゅんとなった真奈美は、放課後の屋上、夕日があたってかわいい。それに空気は読めないが自分以外の人を心配できるいいやつだ。

「ラプラスかあ。」

ラプラスとわ…

2032年7月に導入された最新鋭の人工知能予想型コンピュータ
I。

私の生まれる10年くらい前かな…。

名前の由来は物理学者ラプラスから。

物理学者ラプラスは言った。

「ある物体の現在の状況、それらを全て知ることができる悪魔がい
たらその悪魔はその物体の過去と未来を予想することができるだろ
う。」と。

これが“ラプラスの魔”のことだ。

人類はその悪魔をコンピュータという形で完成させてしまった。

コンピュータに地球の全てを見れるように“目”をつけて宇宙に
飛ばした。

人工衛星として。

本体は5つに分かれていて地球の周りをぐるぐる回っている。

そこで得た地球の情報をリアルタイムで北極に設置されている始祖
ラプラスに送る。

そこで予想するのだ。

このラプラスのおかげで犯罪はほとんど未然に防がれ、自然災害で
の被害は最小限に抑えることができるようになった。

犯罪に関する法律は一新され、全世界で色々な条約が結ばれていっ
た。

難しい話だが、今の世の中知らない人はいないだろう。

「あ！もうこんな時間。電車に間に合わないといけなから私先に行くね また明日！」

「じゃあ私もそろそろ帰ろっかな また明日！」

私の家は学校がある場所から電車で30分。

6 駅離れている。

田舎者は大変だよ…。

家につくとすぐに自分の部屋に行く。

6 畳の狭い部屋だが、自分の部屋なだけあってかなり落ち着く。全体的にピンクが多いテイストだ。

音楽をかけてベッドに横たわる。

こうしている間にお昼寝してしまうことが多い。

今日そうなりそうだよ…。

私はよく夢を見る。

かなり広くてなにもない草原で、もう一人の私とお話する夢。

ずっと眠っていたくなるような…そんな夢だ…。

序章 2：探査機

チリリリリ！

朝、私は時計のベルで起きる。
なんにも変わらない朝。

昨日はお風呂に入って歯磨きをすると寝てしまった。

「お腹へったー。」

居間に行くとすでにご飯が用意されていた。

「早く食べちゃいなさい！」

「は、はい！」

お母さんは厳しい。

一人っ子だからかなあ。

厳しい母に、過保護な父。

私はバランスがいい家族だと思う。

朝ご飯を食べながら、ほぼ毎朝ついているニュースに目をやる。

地震のニュースかあ。

「これって…昨日真奈美が言ってたやつか…。」

私は平和な世の中に生まれた。

ラプラスのある世界。

退屈な世界…。

私がクラスにつくと、あるニュースで持ちきりだった。

それは、惑星探索機が消えたというニュースだ。
宇宙へとばした探索機が火星をすぎたあたりで完全に姿を消したと
いうのだ。

私には関係のない話。
またすぐに見つかるだろう。

私にはオカルトな友達が多い気がする…。
それより、こういう話をする真奈美が -

「ちひろー!!」

ほらきた

中学校からの仲だから行動が結構見えてしまう。

「おはよー！元気いいね なにかあったの？」

「なにかあったの？じゃないヨ！私のオカルト魂に炎をつける事件
があったの!!」

「へ、へー…！どんな事件？」

これはやばいパターンだ…。
気迫だけで負ける。

「惑星探査機が消えたらしいのよ！火星の惑星フォボス…これを調
べに行く予定だったのに！」

「た、単純に見失っただけじゃ…。」

「…あんたそれ本気で言ってるの？見失うわけないじゃない！」

「じゃあなんでだと思っ？」

私はしまったと思った。

これを言ったらまなみは…！

「宇宙人よ！！宇宙人！！！」

こうなったら親友の私でも止められない。

3日間は聞きたくもない宇宙人について語られる。

だから彼氏もできないんだぞ！

いや…人のこといえないか。

「う、宇宙人がなんで？」

「きつとフォボスには地球を監視する施設みたいなものがあるのよ！そこで見つかりたくない彼らは…」

「彼らは…？」

「秘密裏に探査機を奪ったのよ。あるいは壊したか…。」

こ、こわい…

言い方がもはやプロ。

さすがオカルトファン。

こんなにかわいい顔して、淡々と宇宙人について語ってくるまなみは多分なにかに憑依されてると思う。

私はそういうものを信じているわけじゃないが…。

私はずっと考えていた。

あのよく見る夢について。

最近は頻繁に見るようになってきた。

あの夢に出てくる私は、確かに二人とも私なのだ。

そんな気がする…。

序章 3：日常

探査機が消えた事件から一週間が過ぎた。
もうあの時ほどニュースにならなくなった。

しかし、専門家達はまだ議論しているみたい。

特殊な電波の影響で位置情報がキャッチできなくなったとか、宇宙背景放射が……とかよくわからないことを言っている。

まあ…宇宙人説よりは筋が通っていると思う。

その宇宙人説を立ち上げた本人は…

一昨日くらいから風邪で学校を休んでいた。

昨日心配になり電話してみた。

そしたら…

「宇宙人が真実に近づいた私を消そうとしているんだわ!!」とか言ってた。

多分明日から登校してくるだろう。

まあ…なんだかんだ言っても、まなみがいないと学校つまらない。

ラプラスのおかげでなんの事件もおきないしね。

ただぼんやり1日を過ごして、また明日がくる。

明日がくると、またぼんやりしてまた明日だ。

だから人々は探査機がなくなったとか、そういう事件に食いつく。

ラプラスは宇宙のことまでは予想できない。

宇宙から地球へくる干渉は予想できるが、地球から宇宙へ行くものの予想はできないのだ。

みんなラプラスの存在が当たり前になり、平和も当たり前になっている。

こんな平和ボケした世界では探査機を見失ったくらいのお小さなトラブルでもニュースになるし、どうしたらいいかわからなくなる。

27年前：ラプラスができる以前の日常と、今の日常
全く別物だろう。

私達は事件が起きることが珍しくて非日常。

しかし27年前はこんなに平和なことが非日常であったと思う。

このまま行くと、ただ生まれ…ただ生きて…ただ死ぬ
そんな世界になってしまふような気がしてならない。

とか思ってしまう。

やっぱり放課後の屋上は涼しくて考えがまとまるし、見晴らしがい
いから色々な情報が目から入ってくるからいいね

一人は好きだが、友達がいないというわけでもない。

まなみは特別だが、並みくらいに友達はいると思う！多分…。

帰りは一人で電車。

田舎にしては珍しい3両編成だ。

確実にそれに見合う人はのっておらず、家の最寄りの駅につくまで時間がかかる。

だから…たまに寝てしまうことも…。

多分…これは寝てしまう。

私は時間を見る。

まだ20分はある。

寝てしまおう…かな。

夢を見た。

いつも通り、ただっ広い草原でもう一人の私と会話する夢。

いつも会話は聞こえてこない。

今日も聞こえない。

しかし気づいたことがある。

…この草原見たことがある。

いや、違う。

想像したことある？

いや、それとも違うかも。

なんて言うんだらう…私は想像したことないが、私が想像したことある。

そんな感じた。

いつの間にか想像していたのかも。

忘れただけかな？

いつの間にか私の心の片隅にこの草原の景色が置かれていた感じ。

いつまでも眠っていたくなる

「お客様！定期拝見ご協力お願いします。」

びっくりしたー！

車掌さんが定期拝見に回ってきたのだ。

「あ！すみません！」

まあ…いつもこの定期拝見で起こしてもらってるんだけど

今日は帰って寝よう。

また明日が始まる。

明日のために…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3867e/>

100の彼方

2010年10月9日22時59分発行